発問例

●一九二ページ

問 ⊙「この男には欠けていた勇気」（8 行目）とは、どのような勇気か。

答 盗人になることを積極的に肯定する勇気＝果断に悪を選択し、実行する勇気。

補 「さっき門の下で」とは、『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。」（一八五ページ・8 行目）とある箇所を指す。

問 ⊙「この老婆を捕らえたときの勇気」（9 行目）とは、どのような勇気か。

答 悪の所行を断じて許さない勇気＝悪を憎み懲らそうとする勇気。

補 「あらゆる悪に対する反感」（一八八ページ・15 行目）から発した勇気を指す。

問 「そのとき」（11 行目）とは、具体的にはどのようなときか。

答 下人の心に「ある勇気」が生まれてきたとき。

問 「飢え死になどということは」（11 行目）「意識の外に追い出されていた。」（12 行目）のはなぜか。

答 心の中で「盗人になる」（悪に踏み切る）決断を下してしまったから。

補 老婆の論理をてこにして、「盗人になる」ことへの迷いを振り切っている。

問 「きっと、そうか。」（13 行目）と念を押すのは、何を確認するためか。

答 老婆の論理が間違いなく語られたとおりのものであること、さらに、老婆自身が自分の論理を正しいと確かに信じていること。

補 下人が老婆に対して「引剝ぎ」をする決心をしているところから出た言葉である。

問 「嘲るような声で」（14 行目）というのは、どのようなことへの嘲りの気持ちを表したものか。

答 老婆の論理が、下人による老婆自身への「引剝ぎ」の実行に、立派な口実を与えてしまうものであると同時に、最初の被害者が皮肉にもその論理を教えた老婆であること。

補 老婆の論理は、下人が迷いを断ち切り、「盗人になる」決断をする格好の口実になるだけにとどまらず、その実行の手始めに老婆に対して「引剝ぎ」を行うことまでも正当化する口実を与えるものである。下人による生きるための老婆への加害を、老婆は許さなければならないという皮肉。

●一九三ページ

問 ⊙「では」（1 行目）は、どのような内容を受けているか。

答 老婆の論理の内容、すなわち、飢え死にをしないためにしかたがなく悪事を働いても、それは悪とは言えず許されるものである、ということ。

補 老婆の論理の骨子を再確認させる。

問 下人が老婆の着物だけを剝ぎ取って去ったのは、なぜか。

答 下人にとって「盗人」へと踏み出すこと（悪へ踏み切ること）が行為の意味（目的）だったから。

補 主典拠の「今昔物語集」では、老婆の着物のほかに老婆の抜いた髪、死人の着物まで奪っている。作者の創作意図による変更である。初体験のために落ち着きを失って慌てたというのは、下人の確信の強さと老婆との力の差から見て不自然である。

問 「夜の底」（5 行目）の「底」はどのような視線からの描写か。

答 羅生門の楼上から下の深い闇へと注がれた視線。

補 舞台の情景であり、同時に象徴的な意味を持つ表現であることにも注意する。

問 「下人の行方は、誰も知らない。」（12 行目）

という結びは、初出の「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」と比べて、どのような表現効果を生んでいるか。

答 その後を不明とすることで、下人の運命が限定された方向づけから自由になり、深い謎に包まれたものとなる効果。それにより、個々の読者の想像力が刺激される。

補 推敲の努力が生かされた結末の意図を捉える。断絶感や余韻が生まれるという漠として抽象的な言い方は避けたいが、読者によっては詩的効果が生まれる可能性もある。

語句の研究

●一九二ページ

5冷然として、この話を聞いていた。　「冷やかな侮蔑」と「憎悪」を込めて老婆を突き放して見ている下人には、老婆の言葉に同情する余地はない。老婆の言葉は単なる言い訳として耳に入るだけである。

6大きなにきびを気にしながら　親身に老婆の話を聞く態度ではなく、関心が別の所にあって「冷然として」聞いている様子がよく出ている。

7ある勇気　以下「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」と言いかえられている。

8この男には欠けていた勇気　『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気」（P一八五・8）を指す。「肯定する」とは単に論理上そうだと認めるのではなく、実行を決断することまで含んでいる。

9この老婆を捕らえたときの勇気　老婆の行為を「許すべからざる悪」と断定してこの老婆を取り押さえたときの勇気。つまり、〈悪を憎み懲らそうとする勇気〉。

9全然、反対な方向に動こうとする勇気　盗人になることを積極的に肯定し、〈進んで悪を行おうとする勇気〉。「反対の方向」は〈善へ向かうか、悪へ向かうか〉の意味。したがって「門の下で、この男には欠けていた勇気」と重なり、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気」と反対の関係にある勇気である。

12意識の外に追い出されていた。　考える余地すらない。生身の下人にとって、生きてゆくことは自明の前提である。「餓死」は最初から〈避けるべき事態〉として想定されていたにすぎない。なるほど、下人は手段を「選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。」（P一八四・16）と迷っていた。だが、下人が「四、五日前に暇を出された。」（P一八四・3）後、路頭に迷ったあげく飢えと寒さに迫られ、「餓死」の危機を目前にしていたとするには、この下人には余裕がありすぎる。「一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそう」（P一八六・2）というようなゆとりは、明日をも知れぬ危機的な限界状況にある男の思うことではない。激しくつかみかかり老婆を組み伏せる勢いもとても飢えにさいなまれる男のそれではない。

「にきび」がその若さを明示する若い男にとって、「餓死」は現実と言うよりも措定された観念の問題にすぎない。この男は自殺を考えない。男には開拓すべき未来があり、生きることを自明の前提としているのだ。羅生門の下人にとって「餓死」は、このままでは立ち行かないぞという成り行きの先に観念されるものでしかないのだ。「餓

死」が観念でしかないところで、生きるための行動を決意した男が「餓死」を念頭にすら置かなくなるのは、全く自然な成り行きである。つけ加えると、「餓死」については、楼上での「あらゆる悪に対する反感」（P一八八・15の場面で、「恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。」（P一八九・2）と、「餓死」を選ぶ下人の心が語られていたことが指摘されるかもしれない。だが、これは、語り手が第三者に託して「誰かが……問題を、あらためて持ち出したら」（P一八八・16）と仮定した選択の問題であり、この場面で下人自身が「餓死」か「盗人」かなどと悠長に構えていたのではないことは明らかである。この場面の「餓死」は語り手の観念の中にしか存在しない。

14 嘲るような声　老婆の自己弁明の論理は、その形式的整合性で捉える限り、老婆自身への加害を肯定する諸刃の剣である。下人には生きるための悪が許され、老婆は自分が悪をなしている以上、自分に加えられる下人の悪を許さなければならない。下人の声には、老婆の論理が自分の行為の決断のために格好の口実となり、老婆自身の身に返ることになる愚かさへの、皮肉と悪意を込めた嘲笑の調子が込められる。

15 不意に右の手をにきびから離して　思考から行動への転換、決断して踏み出す姿。下人を束縛していた利き手がここで解放され、自由を獲得するきっかけとなっている。

15 老婆の襟髪をつかみながら、かみつくように　酷く非情に老婆を押しひしぐことで、ためらいや自己嫌悪を振り切り、荒々しく悪へ踏み切ろうとする姿である。「襟髪」は、首の後ろの髪。襟元、首の後方も言う。

●一九三ページ

1 俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。　老婆の論理を逆手に取った下人の正当化の論理。自分の迷いを振り切り、生きる手段の選択に当たって、最初から潜在的に志向されていた「盗人になる」道を自身に納得させ、合理化するための強弁である。下人は最初から実際に「餓死」に迫られた切実さを欠いている。そもそも、下人には道徳的な「悪」へのためらいがあったのだろうか、ただ「盗人になる」ことへのためらいがあっただけではないのか、という疑問が起こる科白である。

キー・ポイント　**老婆と下人の現実**　下人に最初「盗人になる」ことを肯定する勇気がなかったのは、道徳的に潔癖な心の持ち主であったからでも、「餓死」の危機を前に激しい心の葛藤を経て唯一の結論を得たからでもない。この若く力にも欠かない男は、前途に迷っている最中に頭をよぎった「盗人になる」道に手早くしがみついたのである。ほかに思いつかないから「盗人になる」ことを唯一の選択肢としたのである。ほかに方法がないからこれをするしかないという心の志向はあった。欠けていたのは大胆に踏み切る度胸である。それまで使用人として世間に暮らし、人並みに生きてきた男には、ためらいはごく自然な心の動きである。「悪」への不決断を、「善」との対比で、人並みの道徳感情以上にことさらに倫理的に意味づける必要はない。高邁な「道徳心」も切実な「餓死」も縁遠い下人に、善と悪の両極に引き裂かれた魂などは存在しない。必要なのは踏み切る契機である。老婆の言葉で初めて、「生きるためにしかたがない」行為が「悪」ではないと気づいたというのは、ほとんど冗談に等しい。すでに、生きるためには「悪」の行為もしか

たがないと言葉にならない結論は得ていた。それに言葉が与えられ、男は踏み切ることができた。老婆の論理は行動へ踏み出すきっかけとして格好の口実を与えるものであった。

老婆の現実は、髪の毛を握って離さない一事が示すように、仕様のない行為にしがみつく切実さを持っている。ことさらに老婆の不気味さを示すような動物の比喩は、実際にはその惨めな生をそのまま反映する。老婆の論理はその現実の表明であり、それがしぶとい居直りや自己正当化と見えるのは、現実の過酷さの中で必死に生に執着する庶民のしたたかさの結果にすぎない。老婆は蹴倒されても下人の「足にしがみつこうとする」ほど必死なのだ。これをエゴイズムと倫理的に断じても詮無い話である。

3 下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った。　「悪」へ踏み切るための象徴的行為。「盗み」が目的なら、老婆の持つ死人の髪や転がっている死体の着物まで奪ってもよいはずである。

5 夜の底　羅生門の楼上から下の深い闇へ視線を注ぐ表現で、奈落へ駆け下りる印象。次の「黒洞々たる夜」と共に人間の生の底知れぬ不可解さ、不確かさ、捉え難さを表象する。我欲に満ちた世界、一切の救済を断たれた無明の闇、無秩序ながら活気に満ちた自由な世界、主人公の悲惨な末路の暗示、この世の地獄を駆け抜ける悪の輝き等々、多様な見方を誘う含蓄がある。夏目漱石の「吾輩は猫である」の「声の底」などから学んだ表現方法だとも推察できる。また、川端康成も「雪国」で「夜の底」という表現を用いている。

10 黒洞々たる夜　暗黒の夜。作品の最後に一切を飲み込む深い闇の世界だけが残される。非日常である羅生門の内部から、白髪を逆さまにしてのぞき込む老婆の目には、日常である京の都が、一切の救済を断たれた地獄の暗黒世界として映っている。

11 下人の行方は、誰も知らない。　初出は、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」とあり、初版本では末尾が「急いでいた。」と変わり、さらに改稿されて現行の形となった。「行方」は、下人の以後の運命を含む表現。暗黒の世界に姿を消したまま、その運命は作品世界の向こうに投げ出されている。

キー・ポイント　**末尾の表現**　断絶と余韻の効果を生む象徴的な一文。まず、駆け下りた後の行方が不明で、作品世界の時間進行が断たれる。下人自身、自らの今後の行動を分かっているのか不明だ。次に、作品世界そのものの判断停止で、下人の人生という意味で、その後の運命が断たれている。語り手は、下人の視点と心理に重なりながら話を進めてきたこれまでの語りの形を捨てて、下人から身を離す。下人が語り手の及ばない世界に立ち去ったとも言えるし、語り手が下人を突き放したとも言える。同時に読み手もこの夜の闇の中で突き放される。幕が降りないまま劇が終わってしまった感じによって、読み手には、下人の行く末についてどんな想像も許されることになる。なお、典拠として「今昔物語集」巻二十九第一話「西市蔵入盗人語」の末尾「盗人ハ蔵ヨリ出テ、行ケリム方ヲ不知ズ」に拠ったかとも推定されている。

注意する語句

（＊で用例を示した）

嘲る…馬鹿にして笑う。悪口を言う。
＊人の失敗を嘲るようなことをしてはいけない。

念を押す…重ねて確かめ注意する。
＊集合時間を守るよう念を押したのに、やはり彼は遅刻した。